

水稲新品種「むさしの 27 号」の特性について

1 育成した経緯

近年の地球温暖化により、埼玉県の夏季は災害とも言える異常な高温が毎年のように発生しています。人間にとっても厳しい暑さですが、イネへの影響も大きく、深刻な被害も発生しています。

イネは穂が出てから 20 日間の平均気温が 27℃以上になると、玄米が白濁する障害粒（白未熟粒）の発生が増加します。その結果、農産物検査の等級が低下し、生産者の所得減少につながってしまいます。2010 年には「彩のかがやき」に大きな被害が発生しました。そこで暑さに強い品種づくりをスタートさせ、2014 年に「彩のきずな」を育成したのに続き、新たに「むさしの 27 号」を育成したのでご紹介します。

2 「むさしの 27 号」の特徴

2010 年に、「むさしの 23 号（「彩のかがやき」の早生突然変異）」と「彩のきずな」を交配し、2018 年 3 月に品種登録出願を行いました。

主な特徴は次のとおりです。

- ①穂の出る時期や収穫時期は「彩のかがやき」と同じ。
- ②暑さに強く、高温による玄米の品質低下の軽減が可能。
- ③5 月中に植えると収穫量は「彩のかがやき」並からやや多くとれる。
- ④粒が大きく、炊飯した米粒の見栄えも良く、「彩のかがやき」並においしい。
- ⑤イネ縞葉枯病、いもち病、ツマグロヨコバイに抵抗性を持つことから、減農薬栽培が可能。
- ⑥穂数が多いことから紋枯病が発生しやすい。
- ⑦6 月下旬植では倒伏が発生しやすい傾向が見られる。

3 今後の取組

2018 年から、高温により品質低下の被害を受けやすい早植栽培地域を中心に現地実証栽培を行ってきました。

来年度はさらに実証面積を広げ、実需者や生産者の評価を得ながら需要に応じた生産拡大をすすめていきます。



写真1：高温により白未熟粒が発生した「彩のかがやき」（右）と白未熟粒の少ない「むさしの27号」（左）



写真2



写真3



写真4

写真2：イネ縞葉枯病と病気を媒介するヒメトビウンカ

写真3：いもち病（写真大：穂いもち、写真小：葉いもち）

写真4：ツマグロヨコバイによるすす病

【問い合わせ先】

埼玉県農業技術研究センター 水稻育種担当

電話 048-594-8334（玉井試験場） FAX 048-532-3113